

\*\*\*\*\*

小林 一也 (こばやし かずや)

\*\*\*\*\*



【書名】2001年宇宙の旅

【著者】アーサー・C・クラーク (伊藤典夫 訳)

【発行】早川書房

「われわれ人類は何処から来て何処へ行くのだろうか？」知能をもち始めた原人の頃から繰り返し問われ続けているであろうこの哲学的な問いは、宗教的な解釈しか望めなかった時代から、考古学や生物学の進展で科学による解釈が可能になるのかも知れない。クラークと映画監督クーブリックは「2001年」でSF (Science Fiction / Sense of Wonder) の視点から大胆な解釈を試み、まだ人類が月面に到達していない1960年代の多くの人々に衝撃を与えた。映画版には難解な描写が多々あるが、映画製作と同時進行で書かれた小説版を読めば、より理解が深まるだろう。続編の「2010年宇宙の旅」の映画版は分かりすぎる映像表現だが、こちらも小説版と合わせて楽しめる。人類の知性の原点は異星人が設置したモノリス、そして人類が導かれる先はスペースチャイルドと「幼年期の終り」に通じる世界観が描かれている。人類とは、知性を与えられ進化の末に刈り取られるための畑に過ぎなかったのかも知れない。一方で木星 (小説版では土星) に向かう探査船には人類が生み出した最高のAIコンピュータ HAL9000が搭載されている。人工的な知性が矛盾する指示に葛藤し、どう振舞うか、という現代にも通じる問題が展開されている。半世紀以上も前の作品であるが、「2001年」はAIに携わる者にとって必読の文献・必見の映像といえる。

【書名】幼年期の終り

【著者】アーサー・C・クラーク (福島正実 訳)

【発行】早川書房

世界大戦勃発寸前に異星人が圧倒的な科学力で介入してきた。数十年におよぶ異星人による平和的な地球支配は、地球上から戦争・貧困・飢餓・迫害などをなくすユートピアを築いたが、姿を現わそうとしない彼らの真意はまったく分からない。彼らは人類が新たな進化の段階に進むのを見守るよう、超越的な存在に命じられていたのだ。異星人は科学技術の面では人類を凌駕していたが、進化の袋小路にはまりこんでいて、人類をうらやましく感じている。ある時、その「進化」は突然はじまり、一瞬で地球上に拡散し、それま

での人類との断絶をもたらす。われわれは何処へ行くのかという問いに、破壊と創造の結末で答えている。少なくとも核戦争で自滅するよりは、はるかに希望を抱かせる話だが、「幼年期」を脱した人類はこんどは何処に行くのか。新スタートレックの「Q」のような存在になり、異星人はどれだけ技術力を高めても「borg」にしかねれないということか。

**【書名】** 宇宙の戦士

**【著者】** ロバート・A・ハインライン（矢野徹 訳）

**【発行】** 早川書房

強化兵装（パワードスーツ）を身に着けた機動歩兵が、意思疎通がまったくできない蜘蛛のような異星人と肉弾戦の大激闘、と要約してしまうと実も蓋もないが、SFガジェット（装置）の斬新さに加えて、軍隊とは何か、社会はどうあるべきかを挑発的に問うている名作である。パワードスーツは、身長3m、重量1トン、核ジェットで数十mほど跳躍し、大量の武器・弾薬で都市を急襲して局地戦を行ない、核爆弾などの大規模破壊兵器を使わずに相手の戦意を喪失させる目的で使われる。邦訳版の挿絵として「スタジオぬえ」がデザインしたパワードスーツの絵が、とてつもなく格好良くて、ガンダムのモビルスーツの元となったと言われている。筋立てからは、軍隊を積極的に肯定し、軍の階級社会こそがまとめた社会を構成するというように読めなくはないが、むしろハインラインは矛盾に満ちつつも活気にあふれる現代社会への愛を逆説的に描こうとしたように思う。また主人公リコが軍隊で何を考え、どう行動したのか、自分に引き移して考えると、戦争ハンターイ平和バンザーイと唱えるだけで平和が達成されるはずがないことも分かるだろう。世界は複雑なのである。ちなみに、小学生のころ初めて読んだSF小説はハインラインの「宇宙船ガリレオ号」だった。復刊を読み直してみると、SFガジェットの古臭さは別にして、少年たちが博士の叔父さんとともに月を目指す冒険が面白く感じられた。ハインラインの名作「夏への扉」は詳しく触れないが、タイムトラベルSFの古典として読んでおきたい。

**【書名】** われはロボット

**【著者】** アイザック・アシモフ（小尾芙佐 訳）

**【発行】** 早川書房

クラーク、ハインラインと来たら、アシモフに触れないわけには行かないが、「ファウンデーション」シリーズは見るからにスペースオペラで読んだことがない（映像では、スターウォーズはほどほどにしか見ないが、スタート

レックはほぼ全シリーズ余さず見ている。Resistance is futile! 壁は崩れ落ちた)。

とはいえ「ロボット（工学）三原則」を提唱した本作品は、SFの古典として押さえておきたい。実はロボット三原則を知ったのは手塚治虫のマンガで、石森章太郎作品のキカイダーに搭載の不完全な良心回路（ジェミニイ）、ハカイダーの服従回路（イエッサー）も影響を受けているだろう。一方で、ギル教授が作ったダーク破壊部隊のロボットや、ターミネーターや、ロボコップの警備ロボットED209のAIにはロボット三原則はインストールされていないようで、アシモフが危惧していたと思われる無原則な殺人ロボットは絵空事では済まなくなっている。現実の社会でも国連でAI兵器の規制を議論する時代（実効性のない規制に終わる可能性大）、ロボット（AI）とは何であってどうあるべきか、技術者ひとり一人が考える材料として本書をお勧めする。関連して、浦沢直樹「PLUTO」は、手塚治虫「鉄腕アトム」の「地上最大のロボット」の回を現代的かつ大胆に解釈しなおした作品で、湾岸戦争の引き金になり実際には存在しなかった大量破壊兵器と、各国が作り出した最高水準のAIを搭載したロボットたちの「苦悩」が描かれていて、たいへん興味深い。

【書名】 星を継ぐもの

【著者】 ジェイムズ・P・ホーガン（池央耿 訳）

【発行】 東京創元社

月面にどこの国か分からない宇宙服を着た人間が倒れていた。原子力電池の同位体比から5万年前の死亡と推定され、当時の人類が到達しない技術レベルである。さらに木星の衛星ガニメデで異星人の巨大な宇宙船が発掘される。謎が謎を呼ぶ事態を解き明かそうと、物理学のハント博士と生物学のダンチェッカー教授が活躍し、さらに何者かが妨害工作を仕掛けてくるSF探偵小説。内容は小説をじっくり味わっていただきたいし、続編の「ガニメデの優しい巨人」「巨人たちの星」と併せて読みたい。作品中でダンチェッカー教授が、月面の男は「地球人に間違いない」と断言し、その根拠として、様々な変化の積み重ねで進化した生物が、異なる環境で進化した生物と、まったく同じ解剖学的・生理学的な形をとる確率はゼロに等しいから、と結論付ける場面は、科学技術に携わる者として胸がスツとした。異星人の描写でこの点をおざなりにしているSFが如何に多いことか…。ホーガンの作品全般では、楽観的な未来を描き、邪悪な者が最後は排除される運命を綴っている。ホーガンの初期の作品「創世記機械」は、戦争を憎む科学者が発明した強力なエネルギー発生装置が、軍に取り上げられて敵国殲滅に使われそうになる

話であるが、結末は世界平和へと向かうホーガンの描く理想社会が描かれている。ところで、星野之宣によるマンガ版「星を継ぐもの」は、三部作を星野流に解釈し直した独特の世界が展開されていて、原作の小説版と読み比べると面白い。ホーガンの存命中にマンガ版を読んでもらい、感想を語ってほしかった。

【書名】 ロシュワールド

【著者】 ロバート・L・フォワード（山高昭 訳）

【発行】 早川書房

現在想定される科学技術の延長線上で、どのような世界になるか、どのような驚きが待っているかを描くのがハードSFと呼ばれる分野である。この作品は、太陽系のすぐ隣のバーナード星系で発見された奇妙な形の双子惑星（惑星同士が潮汐力で崩壊する距離を意味するロシュ限界よりも近いのでロシュワールドと呼ばれる）を、レーザー推進の光子帆船・AI・原子力飛行機・マイクロマシンなどのSFガジェットを使って探検するハードSFの名作である。行ったきりで帰ることのできない光子帆船の旅は数十年かかり、代謝を抑える代わりに知能が退行する葉で乗り切った乗組員たちは、双子惑星の一方の岩石惑星に降り立つ。もう一方の惑星には水やアンモニアの「海」が広がっている。両惑星の探査を進めていくうちに、海の中にたゞよう巨大なクラゲのような有機物を発見する。人類が初めて遭遇したこの生命体は、長い寿命と高度な知能を有する知的生命体で、何かを伝えようとしている。探査船のAIが数字や数式の表現を糸口に意思疎通を試みるが、人類との共通概念がなく難航する。ボタンを押すだけで自動翻訳してくれる、といったご都合主義はハードSFには無用なのだ。生命体は硬い殻（探査船の原子力飛行機）の内部に動く柔らかい物体が地球人であると理解し、彼らの柔軟な体を使った「演劇」を見せることで探査船に訪れる危機を伝えようとしていたのだ。それは何か？ 読んでのお楽しみ。重力工学が専門の筆者が展開するハードSFの精緻な世界に加え、高い物語性がこの作品を傑作に押し上げている。フォワードによる「竜の卵」もハードSFの名作である。地球に近づいた降着円盤をもたない中性子星に探査船が向かい、その表面を電磁波でスキャンしたら、超高重力・超高磁場の表面に発生した生命（体組織の素材は核力で結びついた素粒子）の進化に影響を及ぼした。彼らは人間の時間感覚の数百万倍の速度で活動し、短時間で人類を上回る科学技術レベルに到達する、というハードSFの基本を押さえながら想像力を大いに刺激する話である。この筋立てはスタートレック・ヴォイジャー「超進化惑星の煌き」の回にも使われている。

【書名】 戦士志願

【著者】 ロイス・マクマスター・ビョルド (小木曾絢子 訳)

【発行】 東京創元社

スペースオペラはあまり好きではないのだが、ファンタジー作家でもあるビョルドの描くヴォルコシガン・サーガ (ヴォル=貴族のコシガン家にまつわる物語) は別である。コシガン家のあるバラヤー星は、惑星植民後にワームホールが閉じたために中世ヨーロッパのような貴族制で統治される帝国となり、ワームホールが回復して銀河社会に復帰したあとも封建制が維持されている。コシガン家の跡取り息子マイルズは、胎児の頃に受けた毒ガス攻撃の障害で骨格に問題があり、軍隊にも入れてもらえず旅に出る。しかし持ち前の知恵と勇気と思いやりとハツタリとで仲間を増やし、艦船を入手し、傭兵艦隊のネイスミス提督を名乗るようになる。艦隊の作戦行動を指揮し、補給・経理・人事から営業まで手掛けて、部下たちの厚い信頼を勝ち取る。ビョルドは、こうした軍隊の通常業務や人間関係を丁寧を描くことで、派手な戦闘や武勇伝を描くスペースオペラとは異なり、作品世界に奥行きがもたらされている。ネイスミス提督の存在はバラヤーの機密保安庁に知られることになるが、マイルズは傭兵艦隊を旧知のバラヤー皇帝グレゴールの直属とし、自らは士官候補生となることで本作は終わる。このサーガは「ヴォル・ゲーム」「無限の境界」「名誉のかけら」など何作も続きがあり、いずれもマイルズと仲間たちが信頼と努力で困難な作戦を遂行する物語が展開し、読者はマイルズの人柄に惹かれていくことになる (マイルズではなくてイワン・ヴォルパトリルになりたい!)。ビョルドは存命であるが、サーガは2016年に完結した模様である。ハリウッドから誘惑が多々あろうが、つまらない映像化を許諾してほしくないものである。

【書名】 百億の昼と千億の夜

【著者】 光瀬龍

【発行】 早川書房

人類は何処から来たのか、という問いに、仏教・キリスト教と絡めて光瀬が示した大胆な解釈が、エントロピー増大による「熱的な死」へ向かう宇宙の運命とともに描かれている。なぜ人々は苦しい「生」を過ごさねばならないのか、戦いに明け暮れる阿修羅王、哲学の隘路をたどるプラトン、悟りを求める仏陀、イエスの陰謀を恐れ彼を裏切ったユダたちを軸に物語が展開する。惑星開発委員会によるヘリオ・セス・ベータ型開発は、黎明期の人類文明に何をもたらし何を目指したのか、委員会に指示を出した超越者<シ>の存在と「あなたは自らの死と戦うことができるのか？」という問いが、宇宙

の消長と個の人生とを重ね合わせていく。この宇宙に最初から織り込まれていた「滅び」への予言が輪郭を現わしてくるにつけ、読者の思いは何億年も戦い続ける阿修羅王とともに遙か時のかなたを彷徨うのである。萩尾望都によるマンガ版（秋田書店）は、阿修羅王を怜悯な美少女として描き、梵天王が支配するトバツ市の繁栄や負のエネルギー状態のディラックの海など、読者の想像力を刺激する可視化がなされており、こちらも併せて読みたい（マンガ版だけでもお勧め）。

【書名】 宇宙消失

【著者】 グレグ・イーガン（山岸真 訳）

【発行】 東京創元社

重ね合わせの状態の波動関数が観測により収縮する、という量子力学の観測問題を大胆に脚色。無数の状態に分岐した世界から「意思の力」で一つの世界を選んで確率的にありえないことを実現する、というエヴェレットの多世界解釈をねじ曲げた設定すら読者にはあり得るかもと思わせるように、巧みに話が展開する。ある日突然、太陽系が異星人の手で事象の地平面で覆われ、宇宙全体から切り離されたのは何故か、観測問題と生命のありようを結びつける仮説に、ただただ呆然とするばかり。難解なイーガンの筋立ては、物理学者から見ればおそらく荒唐無稽なのだろうが、ミクロな領域を記述する量子力学がマクロな世界に影響を及ぼす発想はイーガンの「万物理論」にも通じるものがあり、イーガンマジックの波間に読者は翻弄されるのである。デジタル化社会の究極の姿を描いた「順列都市」も、ある意味、お勧めである。（正直、なぜ実体をもたないネットワーク・システムが無限に動き続けるのか少しも理解できなかつたので、どなたか教えてください）

【書名】 虐殺器官

【著者】 伊藤計劃

【発行】 早川書房

「ぼくたちは戦うべきではなかった、愛し合うべきだった」と、自分が撃った波動砲で廃墟にしたガミラス本星で宇宙戦艦ヤマト砲術長の古代進は嘆いていたが、あとの祭りである。取って付けたような「愛」を虐殺の言い訳にするのではなく、互いに憎み合うのが人間の本质であり、その暴力衝動を極度に高める「虐殺器官」が個々人に備わっている、という仮定がこの物語の軸である。虐殺器官は進化の過程で獲得した脳の構造であり、社会生活を営む上で「理性」によって暴力衝動は抑えられているが、特定のパターンの「虐殺文法」に従った言葉が引き金となり言語中枢を介して虐殺器官が活性化す

る。世界各地で頻発するテロは、虐殺文法を駆使する謎の人物によって引き起こされていることが分かり、その人物を暗殺すべく送り込まれた米軍の特殊部隊の大尉が、その人物と関わることで事態は思わぬ方向に進み、世界全体は混沌へと導かれることになる。著者の伊藤計劃は、2000年に米国を襲った大規模テロ「911」後の世界を強く意識し、2007年に本作で作家としてデビューしたが、その2年後に34歳で夭折した。もし計劃が生きていたら、虐殺文法を唱え続けているとしか思えないトランプ大統領や各国（日本を含む）の妄言・暴言政治指導者たちをどう評したか知りたくもある。現実の世界は混沌に向かっているのかも知れないが、後になって「愛し合うべきだった」とつぶやくだけの理性が人類には残されるだろうか？

【書名】一九八四年

【著者】ジョージ・オーウェル（高橋和久 訳）

【発行】早川書房

高度に発達したネットワークが市民を監視し、指導者「ビッグ・ブラザー」の指示に沿うように記録は常に改竄され続ける全体主義国家群が地球を支配している。そんな社会の中で体制に疑問をもった男が、最後は何もかも失い体制に心からの従属と幸福を見い出す究極のディストピア（ユートピアの逆）の物語。

第2次大戦終結後の1948年から執筆したオーウェルは、冷戦の果ての未来を予見して4と8の桁をひっくり返した1984年を題名にしたと言われている。現実の1984年は、ソ連など東側諸国の計画経済の矛盾が拡大し、米ソの緊張状態はやや緩和し、西側は日本のバブル経済前夜など比較的明るい雰囲気であったように覚えている。その後、東ドイツが崩壊し、共産主義国ソ連は共和国に分裂して形だけは民主主義のロシアとなり、冷戦は西側の勝利で終わった。しかし米国のひとり勝ちは長くは続かず、911テロ、中国の台頭、トランプ大統領による独善的な国家主義で、世界は多極化・不安定化しつつある。米国発のIT革命は中国の経済を潤しただけでなく、全土に大規模なコンピュータ・ネットワークを整備し中国共産党の一党独裁を支える重要なインフラとして「顔認証」などを通じた個人の監視システムが構築されるに至った。個人の人権を社会の基本原則に据える西側諸国（特にEU諸国）では、政府やGAFAMなど大企業が個人のデータを保持・利用するのに法の支配が及ぶが、人権よりも国家や党を優先する全体主義国家では「一九八四年」の監視社会は現実のものとなっている。さて、日本の社会は一九八四化を免れるだろうか？ それは国民ひとり一人が、自由と人権に価値を見い出し、それに反する世の中の動きに「否」を唱え続けられるかどうかにかかっている。

【書名】磁力と重力の発見 全3巻

【著者】山本義隆

【発行】みすず書房

中学・高校の物理の教科書には、「力」の性質や力学に関する式や計算法が示され、あたかも昔から周知の事実のように書かれている。しかし、そのような整然とした理論に人類が到達するまで、自然現象をどのように理解し、観測事実を説明するモデルを構築する「科学」の方法論をどう築いていったのかを、科学史の観点から丁寧に論じている。式を覚えることは自然を理解する物理の本質ではない、ということに改めて気付かされる名著である。

【書名】意識はいつ生まれるのか

【著者】M・マッスィミーニ、G・トノーニ（花本知子 訳）

【発行】亜紀書房

自分を自分であると認識できる「意識」の座は、我々の脳にあることは疑いようがない。脳科学の発展で、知覚・運動・記憶・学習など、脳の各領域の役割や連携の様子が分かってきたが、意識を形成する部位やメカニズムは未だ謎のままである。脳が宇宙や素粒子とともに、人類のフロンティア（開拓の最前線）とされる理由でもある。意識をもつ自分が、自らの意識の仕組みを認識できないという単純な事実からも、問題の根深さが覗える。精神科医・神経生理学者の著者らは、意識の座は1200gほどの脳の中にあるという事実から出発し、脳の構造に関する多くの知見をもとに、ニューロン（神経細胞）が絡み合って作られる神経回路網の「複雑さ」こそが意識の源泉であるとする「統合情報理論」を提唱しており、実に興味深い。まだ仮説に過ぎない理論だが、神経細胞内の分子空洞に閉じ込められた電子の波動関数の収縮——すなわち確率的な現象——を意識の源泉とするペンローズの仮説よりは、説得力があるように思える。しかし、もしAIの計算処理のネットワークが一定の複雑さを備えるようになったら、そこに「意識」が芽生えるのだろうか？ 未来のAIロボットは「われ思うゆえにわれあり」とつぶやくのだろうか？ 私の脳内の情報処理ネットワークと同じものを計算機上に再構築できれば、そこに私の意識は宿るのだろうか？ …疑問は尽きない。まさに、フロンティアである。